

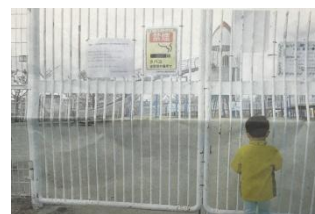
コロナと居場所

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちの日常や居場所を奪い、肉体的にも精神的にも大きなダメージをあたえつつある。まずは私のように、退職後も自宅に閉じこもるのではなく、図書館を毎日の居場所としてきた者の「現状」を語りたい。

平日の朝一番から毎日利用してきた大阪市立大図書館が、3月4日から休館となった。延期が何回も繰り返され、再開の見込みも定かでない。地下鉄「あびこ」から大学まで歩くと、1日8000歩ほどになり運動にもなったが、どうも歩くペースが乱れてしまった。土曜日などに定期的に通っていた、大阪市立中央図書館も3月初旬から休館が続いている。図書館が利用できないと、大切な居場所がなくなり、新聞を読めないのが困る。自宅に配達される新聞だけでなく、他の全国紙・地方紙を図書館でチェックしてきたので、なんだか不安になる。東京新聞や中日新聞、琉球新報や沖縄タイムスなど、地方紙を早く読みたいものだ。

私のような居場所「喪失」など、たいした悩みでないかもしれない。とりわけ心配なのが、発達盛りの子どもや学生、それに「社会的弱者」といわれる人たちだ。

学校の休校が長引き、子どもにとって公園は貴重な居場所だったが、その公園や遊具を使用禁止にする自治体が増えている。写真は朝日新聞4月22日夕刊1面。門を閉ざした遊具施設。閉鎖を告知する紙が貼られていた＝東大阪市の花園中央公園。公園をじっと見ている子どものうしろ姿が、なんとも寂しげだ。専門家も「行政の責任回避の観点から、子どもへの過剰な規制が広がらないか危惧する」「リスクがあるから禁止にしろというのは簡単。一方で、流行は年単位で続く」という指摘も。



小中学校や高校に入学・進級して、新たな生活をスタートさせているはずの生徒は、休校が続くなかで、どんな気持ちなのだろうか。学校に行き、友だちと勉強したいという、子どもたちの切実な声にどう応えていけばいいのか。生徒たちの成長、学習する権利を保障する場としての学校のあり方が問われている。大学と大学生については、経済的な問題などと絡めて別途レポートしたい。

コロナ禍の影響は、子どもだけでない。高齢者も困難に直面している。私もその一人だが、高齢者といっても多様である。介護施設が閉鎖され、自宅に閉じこもり、認知症が進行して、困り果てる高齢者とその家族も多い。高齢者にとって、いつもの居場所が奪われ、居場所が突然変わることは、かなりのダメージとなる。高齢者以上に、障害をもつ人にとって居場所の変化は大きな影響を及ぼす。作業所で働き続けられなくなった障害をもつ人は、どうしているのだろうか。コロナ禍は、障害者施設を直撃している。朝日新聞4月27日朝刊1面は、121人感染の千葉県東庄町の障害者福祉施設の「苦闘の介助現場」を伝えている。コロナと居場所について、続報していきたい。

(2020年4月28日)